TADOKU JUNIOR　アンデルセン童話　★★★☆☆ ふつう　837語

The Naughty Boy

いたずらっ子

Hans Christian Andersen (tr. H. P. Paull et al.)（1846年の本）　原文そのまま　朗読：KathleenLarberg

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　あらしの夜、年とった詩人がずぶぬれの男の子を家に入れてあげました。元気になった男の子は、弓を手にとって……。



Along time ago, there lived an old poet, a thoroughly kind old poet. As he was sitting one evening in his room, a dreadful storm arose without, and the rain streamed down from heaven; but the old poet sat warm and comfortable in his chimney-corner, where the fire blazed and the roasting apple hissed.

“Those who have not a roof over their heads will be wetted to the skin,” said the good old poet.

“Oh let me in! Let me in! I am cold, and I'm so wet!” exclaimed suddenly a child that stood crying at the door and knocking for admittance, while the rain poured down, and the wind made all the windows rattle.

“Poor thing!” said the old poet, as he went to open the door. There stood a little boy, quite naked, and the water ran down from his long golden hair; he trembled with cold, and had he not come into a warm room he would most certainly have perished in the frightful tempest.

“Poor child!” said the old poet, as he took the boy by the hand. “Come in, come in, and I will soon restore thee! Thou shalt have wine and roasted apples, for thou art verily a charming child!” And the boy was so really. His eyes were like two bright stars; and although the water trickled down his hair, it waved in beautiful curls. He looked exactly like a little angel, but he was so pale, and his whole body trembled with cold. He had a nice little bow in his hand, but it was quite spoiled by the rain, and the tints of his many-colored arrows ran one into the other.

The old poet seated himself beside his hearth, and took the little fellow on his lap; he squeezed the water out of his dripping hair, warmed his hands between his own, and boiled for him some sweet wine. Then the boy recovered, his cheeks again grew rosy, he jumped down from the lap where he was sitting, and danced round the kind old poet.

“You are a merry fellow,” said the old man. “What's your name?”

“My name is Cupid,” answered the boy. “Don't you know me? There lies my bow; it shoots well, I can assure you! Look, the weather is now clearing up, and the moon is shining clear again through the window.”

“Why, your bow is quite spoiled,” said the old poet.

“That were sad indeed,” said the boy, and he took the bow in his hand and examined it on every side. “Oh, it is dry again, and is not hurt at all; the string is quite tight. I will try it directly.” And he bent his bow, took aim, and shot an arrow at the old poet, right into his heart. “You see now that my bow was not spoiled,” said he laughing; and away he ran.

The naughty boy, to shoot the old poet in that way; he who had taken him into his warm room, who had treated him so kindly, and who had given him warm wine and the very best apples!

The poor poet lay on the earth and wept, for the arrow had really flown into his heart.

“Fie!” said he. “How naughty a boy Cupid is! I will tell all children about him, that they may take care and not play with him, for he will only cause them sorrow and many a heartache.”

And all good children to whom he related this story, took great heed of this naughty Cupid; but he made fools of them still, for he is astonishingly cunning. When the university students come from the lectures, he runs beside them in a black coat, and with a book under his arm. It is quite impossible for them to know him, and they walk along with him arm in arm, as if he, too, were a student like themselves; and then, unperceived, he thrusts an arrow to their bosom. When the young maidens come from being examined by the clergyman, or go to church to be confirmed, there he is again close behind them. Yes, he is forever following people. At the play, he sits in the great chandelier and burns in bright flames, so that people think it is really a flame, but they soon discover it is something else. He roves about in the garden of the palace and upon the ramparts: yes, once he even shot your father and mother right in the heart. Ask them only and you will hear what they'll tell you. Oh, he is a naughty boy, that Cupid; you must never have anything to do with him. He is forever running after everybody. Only think, he shot an arrow once at your old grandmother! But that is a long time ago, and it is all past now; however, a thing of that sort she never forgets. Fie, naughty Cupid! But now you know him, and you know, too, how ill-behaved he is!

むかしむかし、年とった詩人がいました。心の底からやさしい、年とった詩人でした。ある晩、詩人が部屋にすわっていると、外ではおそろしいあらしが起こり、空から雨がざあざあふってきました。でも年とった詩人は、だんろのそばで暖かく気持ちよくすわっていました。そこでは火が赤々と燃え、焼きリンゴがジュージューと音をたてていました。

「家のない人たちは、ずぶぬれになってしまうだろうな」と、心のやさしい年とった詩人は言いました。

「ああ、入れてください！入れてください！寒くて、こんなにぬれているんです！」と、とつぜん子どもがさけびました。その子は戸口に立って泣きながら、入れてほしいと戸をたたいていました。そのあいだも雨はざあざあふり、風が窓をみんなガタガタ鳴らしていました。

「かわいそうに！」と年とった詩人は言って、戸を開けに行きました。そこには小さな男の子が立っていました。何も着ていなくて、長い金色の髪から水がしたたっていました。寒さにふるえていて、もし暖かい部屋に入れてもらえなかったら、このおそろしいあらしの中できっと死んでしまっていたでしょう。

「かわいそうな子だ！」と年とった詩人は言って、男の子の手をとりました。「お入り、お入り。すぐに元気にしてあげよう！ぶどう酒と焼きリンゴをあげよう。おまえはほんとうにかわいい子だからね！」そして、その子はほんとうにかわいい子でした。目は二つの明るい星のようでした。髪から水がしたたっていても、美しくカールしていました。まるで小さな天使のようでしたが、とても青白く、体じゅうが寒さでふるえていました。手にはすてきな小さい弓を持っていましたが、雨ですっかりだめになっていて、色とりどりの矢の色は、まざり合ってにじんでいました。

年とった詩人はだんろのそばにすわって、小さな男の子をひざにのせました。しずくのたれる髪から水をしぼり、自分の手で男の子の手をはさんで温め、あまいぶどう酒をわかしてやりました。すると男の子は元気になり、ほおはまたばら色になりました。そしてすわっていたひざからとびおりて、やさしい年とった詩人のまわりをおどってまわりました。

「おまえはゆかいな子だね」とおじいさんは言いました。「名前は何というのかね？」

「ぼくの名前はキューピッド」と男の子は答えました。「ぼくを知らないの？そこにぼくの弓があるよ。よくあたるんだから、ほんとうだよ！ほら、もう天気がよくなってきて、窓からまた月が明るく照っているよ。」

「でも、おまえの弓はすっかりだめになっているよ」と年とった詩人は言いました。

「それはほんとうに悲しいなあ」と男の子は言って、弓を手にとり、あちこちからしらべました。「ああ、もうかわいているし、ちっともいたんでいないや。つるもぴんとはっている。すぐに試してみよう。」そして男の子は弓を引きしぼり、ねらいをつけて、年とった詩人に矢を放ちました。矢は詩人の心臓にまっすぐささりました。「ほらね、ぼくの弓はだめになっていなかったでしょう」と男の子は笑いながら言って、走っていってしまいました。

なんていたずらな子でしょう、年とった詩人をそんなふうに射るなんて。暖かい部屋に入れてくれて、とても親切にしてくれて、温かいぶどう酒と、いちばんおいしいリンゴをくれた人なのに！

かわいそうな詩人は床に横たわって泣きました。矢はほんとうに心臓の中へ飛びこんでいたのです。

「ひどいやつだ！」と詩人は言いました。「キューピッドは、なんていたずらな子なんだろう！子どもたちみんなに、あの子のことを話してやろう。気をつけて、あの子とは遊ばないようにね。あの子は悲しみと、たくさんの胸のいたみしかもたらさないのだから。」

そして、詩人がこの話をしてやったよい子たちはみんな、このいたずらなキューピッドにとても気をつけました。でも、キューピッドはそれでもみんなをだましてしまいました。おどろくほどずるがしこいのです。大学の学生たちが講義から帰ってくると、キューピッドは黒い上着を着て、本をわきにかかえて、そのそばを走っていきます。学生たちには、それがキューピッドだとはとてもわかりません。まるで自分たちと同じ学生のように、うでを組んでいっしょに歩きます。そしてキューピッドは、気づかれないうちに、その胸に矢をつきさすのです。若いむすめたちが牧師さんの試問から帰ってくるときや、堅信礼を受けに教会へ行くときにも、キューピッドはまたすぐうしろにいます。そうです、キューピッドはいつも人のあとをついてまわっているのです。劇場では、大きなシャンデリアの中にすわって、明るいほのおになって燃えています。それで人びとはほんとうのほのおだと思いますが、すぐにそれが別のものだと気づくのです。キューピッドは宮殿の庭や城壁の上をうろつきまわっています。そう、あるときなどは、あなたのお父さんとお母さんの胸にまでまっすぐ矢を射たのですよ。二人にきいてごらんなさい。どんな話をしてくれるか、聞けばわかりますよ。ああ、あのキューピッドは、いたずらっ子なのです。決してかかわってはいけませんよ。キューピッドはいつだって、だれのあとでも追いかけているのです。考えてもごらんなさい、あなたのおばあさんにも、一度矢を射たことがあるのですよ！でも、それはずっと昔のことで、もうすっかりすぎたことです。けれども、そういうことは、おばあさんも決してわすれないものなのです。まったく、いたずらなキューピッドったら！でも、これでもうキューピッドのことがわかりましたね。あの子がどんなにお行儀が悪いかも、わかったでしょう！

たんご と クイズ いたずらっ子

poet 詩人	roasting apple 焼きリンゴ	stars 星
angel 天使	bow 弓	arrows 矢
chandelier シャンデリア		

Q1 男の子の名前は？

① トゥーク　② キューピッド　③ チャールズ

Q2 元気になった男の子は、詩人に何をした？

① 矢を射た　② 歌を歌った　③ リンゴを焼いた

Q3 学生のそばを歩くとき、キューピッドはどんなかっこうをしている？

① 天使のかっこう　② 黒い上着で本をかかえている　③ 兵隊のかっこう

こたえ

Q1 ② 男の子は「ぼくの名前はキューピッド」と答えました。恋の矢を射る、いたずらな神さまです。

Q2 ① 男の子は弓を引きしぼって、親切にしてくれた詩人の心臓に矢を放ち、笑って走っていきました。

Q3 ② キューピッドは黒い上着を着て本をわきにかかえ、学生のふりをしてそばを走っていきます。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #1597（Hans Christian Andersen (tr. H. P. Paull et al.)、1846年）。パブリックドメイン。

挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。

朗読（Web版）：KathleenLarberg（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）

和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。